一まいのかん板

小学校のげん関前に立てかけられた一まいのかん板。そこに書かれた言葉には、町のみんなの思いが表れていました。今、思い出しても、なみだがあふれてきます。

〈平成二十一年八月九日〉

（朝からふりつづいている雨、早くやまないかな）

あの日、わたしは、そう思いながら朝からすごしていました。

『ヒューン、ヒューン』

午後八時前ごろ、川をかんししている地区のサイレンが鳴りひびきました。父は、近くに住む一人ぐらしのお年よりを心配して、土しゃぶりの雨の中、外へとび出して行きました。残された家族は、みんなでおばあちゃんを安全な二階へつれて上がりました。そのあと、大事なものを持って上がり、ゆかに置いている物もすべてテーブルの上にあげました。そのときです。げん関から入ってきたまっ黒な水がみるみる上がってきたのです。わたしは、生まれてはじめて（命があぶない）と感じました。そして、家族と大急ぎで二階へかけあがりました。

「バチッ！」

家の中の電気が消え、あたりがまっ暗になりました。停電です。わたしは、不安な気持ちで、二階のまどからこわごわ外を照らすと、遠くの家からもこちらを照らす明かりが見えました。

すごい音がするので、そちらへ明かりを向けました。家の前の道路をせんたく機や流し台がゴロゴロと流れていくのが見えました。車や物置もぶつかりながら流れていきます。わたしは、急に足がすくんで、がたがたとふるえてきました。

そのばん、わたしは、ほとんどねむれませんでした。

〈変わり果てたまち〉

よく日、わたしは、自分の目をうたがいました。げん関からは、三十センチ以上の高さまで、どろが流れこんでいたのです。

家の前の電柱は、一本が折れ、もう一本はたおれていました。ガードレールはねじ曲がり、橋のらんかんには流されてきたいろいろな物が引っかかっていました。

すっかり変わり果ててしまった町のすがたに、わたしはまるでゆめを見ているようでした。

そのときです。きのう、雨の中をとび出して行った父が、もどってきたのです。わたしは、心の底からほっとしました。

でも、その日からが大変でした。来る日も来る日も、「どろ出し」「仕分け」「どろあらい」など、家族みんなであとかたづけをしました。

〈ボランティアがやって来た〉

そんなわたしたちにとって、心強い人たちがいました。

「町がこんなになっているのに、試合どころじゃない。」

高校の野球部のお兄さんたちは、水害直後からやって来て、重いたたみを次々に運び出してくれました。

近所で手伝ってくださる人たちの中には、遠く四国からとまりがけでやってきたというお姉さんもいました。

「家でニュースを見ていると、じっとしていられなかった。」

というお姉さんの言葉に、わたしは、思わずなみだがこらえきれなくなりなりました。

「阪神・淡路大しんさいでお世話になったおん返しや。」

というおじさんは、仕事を休んで神戸からやってきたそうです。

「みんないっしょや、おたがいさまや！」

おじさんの声に、笑い声がおこりました。

どの人の顔もみんな、あせだらけ、どろだらけでした。

こうして、たくさんの方々のおかげで町は少しずつかたづいて、元の元気なすがたをとりもどしていったのです。

〈自分にできること〉

あのときのおそろしさは、今でもわすれることはできません。ただ、わたしの心の中には、この水害で変わったこともあります。それは、自分の町が前よりも好きになったことです。この町には、助け合える人がたくさんいるからです。

わたしも大きくなったら、人の役に立てる人になりたいです。そして、もし、どこかでこまっている人がいたら、今度はとんで行って手をさしのべられる人になりたいと思います。

でも、そんなわたしに父が言いました。

「大きくならんでも、できることがあるんとちゃうか。」

（できること・・・今のわたしに・・・）

心の中で、わたしは、父の言葉を何度もくり返しました。